人間と金銭 ――『クリスマス・キャロル』と『木馬の騎手の勝利』の比較研究 ――

山 田 晶 子

序

金銭、すなわち物質的な財産・富は古代から人間と切り離せないものである。大勢の人々が人間と金銭の関係を考えてきたし、文学作品にも主題として扱われている。代表的な英文学作品にはウィリアム・シェイクスピア（William Shakespeare）作の『ベニスの商人』（*The Merchant of Venice*）がある。そして多くの場合において金銭の主題は愛の主題と密接に結びついてる。愛か金かという二者択一の主題も文学作品の重要な主題である。

本稿では、英文学史において中心的な存在を占めている２人の作家の作品、つまり19世紀に活躍したチャールズ・ディケンズ（Charles Dickens）作の『クリスマス・キャロル』（*A Christmas Carol*）と20世紀に活躍したD.H.ロレンス（David Herbert Lawrence）作の短編小説『木馬の騎手の勝利』（*The Rocking-Horse Winner*）を比較研究することによって、あるべき人間と金銭の関係について考察したい。『クリスマス・キャロル』と『木馬の騎手の勝利』の両方に存在するものは子供であり、また大人の金銭に対する執着である。しかし、時代が19世紀と20世紀ということで違っているため、当然両作者の人間と金銭との関わり方の描き方は異なっているのであるが、本質的な点は同じではないかと思われ

る。

Ⅰ 『クリスマス・キャロル』

A. 主人公スクルージの不幸

『クリスマス・キャロル』はディケンズの数多くの小説の中にあっても色あせることがない傑作小説である。彼は1843年に『クリスマス・キャロル』を出版し、1852年までに5作のクリスマス小説（*Christmas Books*）を書いている。また1867年までに20編の『クリスマス物語』（*Christmas Stories*）を書いている。このようにクリスマスを主題とする多くの作品を書いたディケンズであるが、その中でも『クリスマス・キャロル』は有名な作品である。特に子供たちに愛されているという点でよく知られているが、この小説が大人も読むべき作品であるということは強調されるべき点である。なにしろ主人公は年取った男性エブニザー・スクルージ（Ebnezer Scrooge）なのである。彼は50代半ばと思われる。子供に愛されるという理由としては、構成上はスクルージが幽霊や精霊たちによって空を飛び、自分の過去・現在を振り返り、さらには未来を知らされるという面白さから生まれ、また勧善懲悪という分かりやすい主題が読み取れるということにある。しかし、このような単純な主題のみならず、また権力者と支配される人々、人間が人間を裁くことができるのかどうか、といった哲学的で重い主題も含まれているのである。この点については三ツ星堅三も「しかし、同時に、『クリスマス・キャロル』をもって始まる一連の『クリスマス・ブックス』などには、この小説家独特の、本質的な特徴が顕著にみられ、単に隣人愛を説いた物語とか、人の善意をたたえた教訓談として片づけられないものがある」[(1)]と述べている。

まず、主人公スクルージの性質について考えてみたい。彼は商売をし

ていて、金を何よりも大切にしている。いわば守銭奴である。時はクリスマスイブであり、街中がクリスマスを祝う準備で忙しい。彼にはマーレイ（Marley）という相棒がいたが、マーレイは7年前に亡くなったので、スクルージは1人で会計事務所を経営している。小説の冒頭の時点ではスクルージは次のように描写されている。

> Scrooge! a sqeezing, wrenching, grasping, scraping, clutching, covetous old sinner! Hard and sharp as flint, from which no steel had ever struck out generous fire; secret, and self-contained, and solitary as an oyster.[(2)]

上の引用に見られるように、彼は「罪人」であると描写されているが、それはなぜかと言えば狭量で、ケチで、自己満足に耽り、心を閉ざして秘密を持ち、孤独であるからである。つまり彼には他者との触れ合いが全くないのである。この「触れ合いがない」ということはロレンスが『チャタレー卿夫人の恋人』(*A Lady Chatterley's Lover*)でもコニー(Connie)の不幸せの原因としている点であり、ロレンスは、人間には他者との触れ合いが必要であると強調している。ディケンズもスクルージの孤独を彼の不幸の原因として描いているのである。彼は寒さと関係付けられており、その存在が「寒い、冷たい」という特徴を持っている。そして彼はそれを全然気にかけないのである。彼は“dark master!”[(3)]と犬から呼ばれていると描かれているが、人間ではなくて動物から呼びかけられるという点や、この作品では愛を表現するのに用いられている「白さ」や「光」と対極の「黒さ」を特徴とする「黒い主人」という言い方にも、彼が悪魔と関連付けられていることが分かる。一方で、ロレンスの作品においては「黒さ」は独自の意味を持ち、『アルヴァイナの堕落』(*The Lost Girl*)では同じく“Dark Master”[(4)]という表現があるが、これは

キリスト教批判の表れとして描かれ、肯定的な意味を持つ言葉である。

スクルージには亡き妹の息子である甥のフレッド（Fred）がいて、彼の事務所を訪ねてきて、クリスマスには家へ来てほしいと招待する。フレッドは輝かしく、若く、美しく、きらきらしている。彼は紛れもなく善の使者である。しかし、フレッドは貧乏である。スクルージは甥に向かって、貧乏なくせになにを浮かれているのか、と皮肉を言い、招待を断りクリスマスをくだらない、と毒づく。しかしフレッドは彼に対して全然怒らない。彼はディケンズの描く理想の人間像であろう。彼にとってクリスマスは以下の特徴を持ったお祭りである。

> A kind, forgiving, charitable, pleasant time: the only time I know of, in the long calendar of the year, when men and women seem by one consent to open their shut-up hearts freely, and to think of people below them as if they really were fellow-passengers to the grave, and not another race of creatures bound on other journeys.(5)

上の引用から、クリスマスが人間にとって、本来の理想的な関係を結ぶべき時節であるということがうかがえるが、これはディケンズの思想を表していると思われる。「閉ざした心を他者に開く」という思想であり、「自分より身分が下の者に対しても、人間として平等であると考える」という思想である。このような思想はディケンズが生きていた19世紀のみならず、古代から現代にいたるまで普遍的で理想的な思想であると思われる。しかし、スクルージは２人の紳士が彼の事務所へクリスマスのための寄付金を求めてやって来た時には、貧乏人は刑務所と救貧院へ収容されればよい、と言って２人を追い払う。彼は、貧乏人は怠惰なために貧乏だと考えているのである。しかし、『クリスマス・キャロル』が

書かれた19世紀半ばは、産業革命を起こしたイギリスが工業化をどんどん進めて、社会の機械化・都会化が進んだ時代であり、イギリスが世界の国々の中でも経済発展を目覚ましく遂げていた時代である一方で、金持ちと貧乏しい人々の格差が大きくなって、貧しい人々は労働力として搾取されていたのである。一生懸命働いても生活が向上せず、その結果生きるために犯罪を犯す人も大勢いたのだ。貧乏人は救貧院へ行けばよい、というスクルージの考えに対して、２人の紳士のうちの１人が「多くの人たちはそこへ行くことができないし、多くの人たちはそこへ行くよりも死んだ方がましだ、と考えている」[(6)] と、答えるように、救貧院での生活は途方もなく非人間的であったと思われる。この点については、ケロウ・チェズニーが『ヴィクトリア朝の下層社会』で詳しく論じている[(7)]。一方で、市長は壮麗な大邸宅に住んで、50人の料理人や執事を持っているのであり、貧富の差が大きいことが述べられている[(8)]。それゆえに、ディケンズは救貧院への批判を行っていると思われる。このような点はリアリズムが表れている箇所である。社会の本質を理解していないスクルージは、狂人[(9)] であると書かれている。彼が事務所で働かせているボブ・クラチット（Bob Crachit）という事務員は、いつもスクルージに見張られており、超安賃金で雇われており、極寒の季節にも石炭一個しか燃やすことができないので震えている。スクルージは金持ちであるがゆえに権力があるが、スティーヴン・プリケットはこの点について「権力としての金は、ヴィクトリア朝小説の中心主題である」と述べている[(10)]。更に、ディケンズは金持ちの人々の批判として、彼らが想像力を欠いていることを挙げている。スクルージもその人たちの一人であるが、ロンドン市の金持ちの人たち、自治団体や、市会会員や同業組合員等の人々もこの部類に属する人々として挙げられている[(11)]。想像力があれば、他者への思いやりや優しい気持ちが生じるであろうに、それがないため、金持ちと貧乏な人々との格差が広がるのである。

スクルージの自宅はマーレイと一緒に住んでいた時のままであり、今は彼は1人で住んでいるのだが、その家の特徴は暗い、侘しい、悲しみに満ちている、という特徴を備えている。スクルージは心に寒さ、冷たさを持っているため暗さにも平気である。「暗さは安上がり」[12] なのである。しかし、このような冷酷なスクルージをも、ディケンズは、マーレイの幽霊や3人の精霊の姿を夢の中で見させて、改心させようとするのであるから、作者は温かい心を持っているのであり、大勢の読者を獲得したのであろう。

最初にマーレイの幽霊が登場する。彼の体には重い鎖が巻き付いてるのだが、この鎖は、マーレイが生前にスクルージと同じく冷酷な人間であったために彼を縛っているものだと告白する。マーレイの悲しみと苦しみを聞いたスクルージは、最初はばかばかしいと思っていたのだが、次第に自身にも当てはめて考えるようになる。マーレイはすべてを金に換算して考え生きていたのであり、このことは現在のスクルージの生き方に当てはまる。それでマーレイはスクルージに自分と同じ運命を避けることがまだできる余地があることを告げに、警告に来たのである。そして今後3人の精霊がスクルージに表れると告げて消える。そしてこの時スクルージは多くの幽霊の顔を見るのだが、彼らは罪深い政府の役人達であり、自由がなく繋がれていた[13] と書かれているので、ディケンズの政府への批判がここにも表れている。

B. スクルージの改心

この後3人の精霊が登場するが、彼らは「過去のクリスマスの精霊」、「現在のクリスマスの精霊」、「未来のクリスマスの精霊」である。過去のクリスマスの精霊は体が小さくて子供のようである。スクルージは光に満ちたこの精霊と一緒に空を飛んで行き、自分の過去を見せられる。

それはスクルージの子供時代である。子供の時はスクルージも温かな心を持っていたと思われる。

> He was conscious of a thousand odours floating in the air, each one connected with a thousand thoughts, and hopes, and joys, and cares long, long, forgotten! (14)

上の引用に見られるように、スクルージの子供時代は、芳しい匂いに満ちて、希望や喜びや思いやりで溢れていたのである。『クリスマス・キャロル』においては、ディケンズは子供時代を善なる時代と捉えていると思われる。しかし、現在のスクルージはこのような温かな時代から遥かに切り離されてしまっているのである。彼の家が破産して友人はいなくなり、スクルージは一人ぼっちになった。『ロビンソン・クルーソー』(*Robinson Crusoe*) を読んでいたスクルージはもはや本を読まなくなってしまった。ここには貧乏が子供の教育にも影響を与えるということが書かれている。彼は、奉公に出されるが、そこの主人フェジウィッグ(Fezziwig)は優しい人で、彼を含む2人の奉公人を親切に扱ってくれた。クリスマスには皆でダンスをして楽しんだ。人と人との繋がりが存在しており、明るく笑いに満ちた世界であった。スクルージはこのような光景を精霊から見せられて、心が痛むのを感じる。現在の自分からはあまりにも遠い世界であり、かつそれが懐かしかったから。

次に見せられたのは、彼の初恋の女性である。彼は彼女と結婚しようと思っていたのだが、彼が青年期に至った時には金を何よりも重視する人間になっていたので、彼女は彼から離れていってしまったのである。

> There is nothing on which it is so hard as poverty; and there is nothing it professes to condemn with such severity

as the pursuit of weath! [15]

上の引用に見られるように、スクルージは、子供時代に家が破産したために悲惨さを味わった経験から、金を第一に追及するようになったかもしれないのだが、婚約者は彼から高貴さが１つずつ消えていくのを見て、耐えられなくなったのだ。精霊が見せてくれた彼女の現在の姿は、別の男性と結婚して多くの子供に恵まれ、金持ちではないがささやかに人生を楽しんでいるものである。彼女は心から笑っていて幸せそのものである。スクルージはこのような光景を見て反省し、また心が痛む。

次に表れた精霊は巨人の大きさをしている。この精霊はまたスクルージを連れて空を飛び、様々な光景を見せてくれる。精霊は松明を持っており、それによって特別な味わいをものに振り掛けて、食事の場合はその味が良くなるというように、善なる精霊である。彼にとってはスクルージは悪の存在である。

> 'There are some upon this earth of yours,' returned the Spirit, 'who lay claim to know us, and who do their deeds of passion, pride, ill-will, hatred, envy, bigotry, and selfishness in our name, who are as strange to us and all our kith and kin, as if they had never lived. Remember that, and charge their their doings on themselves, not us.' [16]

上の引用では、聖職者たちが批判されていると思われる。彼らは神や精霊を知っていると世間には言っているが、それは間違いである、なぜなら彼らは神の名前を借りて私利私欲に走る輩であるから、と２番目の精霊は言う。ここでは、聖職者たちがその偽善性を批判されているのである。

次に精霊がスクルージを連れて行ったのは、彼の会計事務所で働いている事務員のボブ・クラチットの家である。彼には妻と4人の子供がいて、一週間で15シリングの収入という貧しい生活をしているのであるが、家族が仲良く助け合って生きており、また温かな笑いで包まれた生活に幸福を感じている。そして、スクルージは、死にたいなら死ねばいい、多すぎる人口が減るから、と以前に言った自分を反省することになる(17)。

後に精霊が戒めるように、人間自身は、誰が生きる値打ちがあり、誰が生きる価値がないかを決めることができないのである。

次にスクルージが連れて行かれた所は、甥のフレッドの家であった。ここでも多くの子供を含んだ大人数の家族がクリスマスを喜び、心から笑っている。

> It is a fair, even-handed, noble adjustment of things, that while there is infection in desease and sorrow, there is nothing in the world so irrisitibly contagious as laughter and good-humour.(18)

上の引用では純真な笑いが賞賛されている。スクルージの姪も甥と同じように心から笑う。このような人生肯定的な笑いは、ロレンスも男女の性愛の極みの喜びとして描く場合があるが、一方彼の皮肉な笑い、戦術としての笑いとはまた異なった種類のものである。ロレンスの笑いは特にキリスト教会を批判するのに描かれている。

> For it is good to be children sometimes, and never better than at Christmas, when its mighty Founder was a child himself.(19)

上の引用からわかるように、クリスマスは、この祭りの創生者であったイエス・キリストが生まれた時、つまり子供の誕生の祝日なので、子供の存在を讃えるものと言える。ディケンズは『クリスマス・キャロル』を書くに当たり、子供というものを讃えているのであり、また大人もときどき子供心に帰ることが必要であり、それにはクリスマスが最適な季節であると考えているのである。クリスマスという祝日は、イギリスでは19世紀の中頃まで廃れていたということである。しかし、ディケンズは、クリスマス小説とクリスマス物語を書くことによってイギリスで再びクリスマスが祝われることを願ったということである。それは彼が、社会が子供を大切にするべきであると願っていたためであると考えられる。ディケンズが活躍した19世紀の半ばにおいては、悲惨な状態に置かれていた子供が多くいたのである。

> They were a boy and girl. Yellow, meager, ragged, scowling, wolfish; but prostrate, too, in their humility.[20]

上の引用には痩せて飢えて狼のようにどう猛でありかつ賤しい子供が書かれている。

> 'They are man's,' said the Spirit, looking down upon them. 'And they cling to me, appealing from their fathers. This boy is Ignorance. This girl is Want.[21]

上の引用では「無知」と「貧困」が描写されている。2人の子供たちは親から虐待されているために精霊に助けを求めているのであろう。教育を受けることが仕事に就ける条件であり、そのため「無知」も「貧困」もなくさなければならないのである。ディケンズの他の小説では、親が

子供に非合法的な仕事をして金を稼ぐという内容のものもある。『クリスマス・キャロル』では大人たちへの戒めの意味が大いに入っているのである。

さて、第4節において最後に登場する精霊は、未来の精霊であり、スクルージに彼の未来を教えてくれる。この節では彼は死んでおり、その死後の扱いが描かれている。彼は生前に道徳的な悪を犯していたので、葬式に来てくれる人はいなく、盗人たちが家財を盗みに来て、それをスラム街の犯罪者たちがいる場所で非合法的な取引で売り、金を儲けようとしている様が描かれている。19世紀におけるイギリスの下層社会の様子がリアルに描写されている。

> They left the busy scene, and went into an obscure part of the town, where Scrooge had never penetrated before although he recognized its situation, and its bad repute. The ways were foul and narrow; the shops and houses wretched; the people half-naked, drunken, slipshod, ugly. Alleys and archways, like so many cesspools, disgorged their offences of smell, and dirt and life, upon the straggling streets; and the whole quarter reeked with crime, with filth, and misery.[22]

作者は、愛のない、他者と交わらない利己的な生き方をしてきた人間は、最後には犯罪者に取りつかれるということを述べようとしていると思われる。つまり道徳的な悪に染まっている人間は、実際的な側面でも悪に巻き込まれるということなのであろう。このような思想はまさに大人に対して発せられたものと言える。ゆえに、『クリスマス・キャロル』は子供讃歌、及びお祭りの楽しさが描かれており、また勧善懲悪的な思想がある点では子供向きの作品であると言えるが、社会改革の必要と大人

の生き方の複雑さを描いている点では、リアリスティックな作品であると言える。

スクルージは夢の中で4人の幽霊及び精霊に会って、今までの自分の生き方を反省させられる。夢から目を覚ますと12月25日でクリスマスであった。彼は生まれ変わって、温かな優しい心を持つようになり、人々から尊敬されるようになる。夢から覚めたスクルージは、自分がまだ生きていることを知って喜ぶ。そして長い間笑ったことがなかったのに、笑うのである。

> 'There's the saucepan that the gruel was in!' cried Scrooge, starting off again, and frisking round the fire-place. 'There's the door, by which the Ghost of Jacob Marley entered! There's the corner where the Ghost of Christmas Present, sat! There's the window where I saw the wandering Spirits! It's all right, it's all true, it all happened. Ha ha ha!'
>
> Really, for a man who had been out of practice for so many years, it was a splendid laugh, a most illustrious laugh. The father of a long, long line of brilliant laughs! (23)

上の引用に表れているように、スクルージが笑うようになったということが彼の再生への第一歩である。かくように、素直な笑いというものは人間にとって大切なものである。改心したスクルージは、ボブ・クラチットへ大きなガチョウを送ることを決心し、そのことが楽しいのでくすくす笑う。

> The chuckle with which he said this, and the chuckle with which the chuckle with which he recompensed the boy,

were only to be exceeded by the chuckle with which he sat down breathless in his chair again, and chuckled till he cried.[24]

上の引用に見られるようにスクルージは遂に笑いの人となってしまうのである。

この小説は、貧しいけれども温かな人々への讃歌であり、また冷たかった人々を改心させようとする教訓的な小説でもある。そして、更に社会改革によって、社会のどん底で喘いでいる人々を救おうと権力者たちが心を向けてくれることを願っていると思われる。

Ⅱ 『木馬の騎手の勝利』

D.H. ロレンス作の『木馬の騎手の勝利』も、また、金銭に執着した女性を主題としている短編小説であるが、これは『クリスマス・キャロル』とは異なって、悲劇的な結末を迎えている。ロレンスが生まれた時代は、ヴィクトリア朝後期であり、イギリスは大英帝国として発展していたがまた下り坂になっていた時代である。一方、産業・機械文明はどんどん成長し、その結果貧富の差がますます開き、イギリスでは労働者がストライキを繰り返し行った時代である。大勢のイギリス人たちは金持ちになることを追及していた。女性の地位向上を目指す運動も活発になり、女性も大学教育まで受けられるようになり、その結果として社会で働くことができるようになり、普通選挙が実施された。しかし、1914年～18年には第一次大戦が生じて、ロレンスもこの戦争時代を生きた。戦後はますます貧富の格差が開いた。

『木馬の騎手の勝者』に登場する女性は、金銭に対する執着が非常に強い母親である。彼女にはポール（Paul）という息子がいる。この子供が主人公であるので、『クリスマス・キャロル』と同様に子供を中心と

して主題を考察してみよう。彼はまだ幼くて10歳前後と思われる。母親は、「美しくて、いろいろと有利な点を持っていた」[25] が「運がなかった」[26] と冒頭に書かれている。次に「彼女は愛のために結婚したのだが、愛はごみくずに変化してしまった」[27] と書かれ、美しい2人の子供に対して愛情を持つことができす、負担に思うようになったことが分かる。彼女の一家は、庭付きの心地よい家に住み、召使もおり、近隣の所帯のうちでは社会的に優れた存在であることが分かる。しかし、彼女の一家は不幸である、と書かれている。その理由は「十分な金がない」[28] ためである。『クリスマス・キャロル』の時代に比べれば、『木馬の騎手の勝者』で描かれている女性の物質的な生活環境は、申し分なく良いものである。彼女は中流階級に属しており、立派な家具を持っており、夫婦ともに働いている。だが、2人とも趣味が高尚でそれに金がかかる。子供たちは高価で見事なおもちゃを持っている。このように、『クリスマス・キャロル』で描かれている貧乏なフレッドの家族やボブ・クラチットの家族や、スクルージの昔の婚約者の暮らしよりも、女性の生活環境は恵まれているのに、なぜ彼女は「もっとお金がほしい」[29] ということで、また「誰にも愛情を感じられずに」苦しんでいるのだろうか。

息子のポールは、家の中で囁かれるひそかな言葉「もっとお金が必要だ」に苦しんでいる。この家族には自家用車がないのだが、母親は、なぜ家には車がないのか、と問う息子に「貧乏だから」と答えている。しかし、彼らはいつもタクシーや叔父の車を利用できるので、読者には、ポールの家が母親が言うように貧乏だとは思えない。母親は息子に、自分たちが貧乏であることの理由として「夫に運 (luck) がないためだ」[30] と答えているが、彼女のこのような考え方にこの一家の不幸の原因があると思われる。母親は息子のポールに「自分は運がいいよ」と言われると、冗談に受け取ってまともに相手にしない。ここに不幸のもう一つの原因がある。ポールは母親からの愛情に飢えている。母親はいつも不機

嫌であり、お金に執着しているので、子供たちのことを本気で思う心の余裕がないのであろう。

「運とはお金をもたらすもの」[31] という母親の言葉を信じたポールは、庭師のバセット（Bassett）と叔父のオスカー・クレスウェル（Oscar Cresswell）と一緒に本物の競馬に夢中になり、それによって金を手に入れて、母親にひそかにその金が渡るようにして、彼女を喜ばせようとする。勝ち馬を予想するのがポールの役目である。オスカーは初めはポールの言葉を本気にしなかったが、彼の予想した馬が勝ったことを知って、彼を信じるようになる。３人は、まず、５千ポンドを儲ける。そしてそれを１千ポンドづつ母親の誕生日にひそかに渡すことにしたのだが、初めて１千ポンドを贈られた時、彼女は、喜ぶどころか、５千ポンドをまとめて手に入れたいと望み、その通りになる。しかし彼女がその金で手に入れたものは、ぜいたく品と借金の返済である。そして更に家の中には恐ろしいささやきが溢れるようになる。

> So Uncle Oscar signed the agreement, and Paul's mother touched the whole five thousand. Then something very curious happened. The Voices in the house suddenly went mad, like a chorus of frogs on a spring evening. There were certain new furnishings, and Paul had a tutor. He was really going to Eton, his father's school, in the following autumn. There were flowers in the winter, and a blossoming of the luxury Paul's mother had been used to. And yet the voices in the house, behind the sprays of mimosa and almond – blossom, and from under the piles of iridescent cushions, simply trilled and screamed in a sort of ecstasy:
> "There must be more money! Oh-h-h; There must be more

money.

Oh, now, now-w! Now-w-w—there must be more money!—more than ever! More than ever!"[32]

上の引用で、ポールの父親が名門イートン校の出身者であり、ポールもまたイートン校を目指している、と書かれているので、彼の家族は中流の上の階級であるとも思われる。この短編小説が発表されたのは1925年であり、この時代においては、イートン校へ通えるのは、まだ社会的に上・中流階級の子弟であったからである。家庭の中には冬でも花が飾られており、母親はこの上ないぜいたくをし、ポールはイートン校へ入るために家庭教師からラテン語やギリシア語を学んでいる。このように、『クリスマス・キャロル』の家族と比較すれば、教育上も生活用品も暮らしぶりも、ポールの家族は遥かに優れているのである。

だが、ポールが本物の馬ではなく、自分の寝室に隠した木馬というおもちゃの馬に乗って、天から啓示を受けて競馬の勝ち馬を予想するということにより、これまで3人は金を儲けてきたのである。あまりにも非現実的であり、無謀なやり方である。これは彼に運があったためではなくて、偶然の結果であろう。それゆえ、ポールの予想も外れることがあり、ますます彼は木馬に夢中で乗る。OED によれば、luck の意味には① '1.a. Fortune good or ill; the fortuitous happening of events favourable or unfavourable to the interests of a person' ② '2.a. a Good fortune; success, prosperity or advantage coming by chance rather than as the consequence of merit or effort' があり、悪運の意味も入っているのだが、母親は②の意味しか考えていない[33]。しかし、①のうちの「悪運」という意味が働いて、ポールの悲劇を招いたのである。ポールは、'lucre'「金銭」を 'luck' と聞き間違えて、母親に 'luck' は金をもたらすものと教えられる[34]。母親は、このように 'luck' を実際的なものと捉え、い

つも頭を痛めているので、ロレンスの理想とする本能や直観を大切にする生き方とは異なった生き方をしている人間である。‘luck’は、ロレンスの説く本能、直観の意味と同じ範疇のものであり、理性でもぎ取ることができないものである。それなのに、ポールがそれを理性や知性で知ろうとしたこと（競馬の勝ち馬を知ること）が悲劇の原因になっていると思われる。その結果、彼は心身を消耗して、マラバーという馬を予想してそれが勝ったのだが、ポール自身は命を落としてしまう。これもひとえに母親を喜ばせ、彼女の愛情を得たいがためであった。

母親はマラバーが勝ったことによって8千ポンド以上を手に入れるが、代わりに息子を失う。金は息子の命を代償として奪い取った。母親は初めてヘスター（Hester）という名前であることが分かる。彼女は息子を亡くしてようやく人間らしさを取りもどしたと思われるのであり、それゆえに実体をもった人間になったということで名前が挙げられるのだが、今となっては時すでに遅しである。

結論

普通の人間は金銭に執着する。そのために法律上の犯罪や道徳的な犯罪を犯す。ディケンズは、『クリスマス・キャロル』で、金に勝る人間関係の温かさを説いているが、これは貧しい4つの家庭の描写が善良さばかりを持っているという点で、人間同士の葛藤がないという点で非現実的であるとは言え、クリスマスのお祝いによって、人間が金に執着することを離れることを説いているし、社会批判も表れている。一方、ロレンスの『木馬の騎手の勝利』は、現代人の悲劇であり、金に執着することが心では間違っていると分かっていても、なかなかそれを離れることが難しいゆえに現実的な物語となっている。しかし、「運」は「知識」とは相反するものであり、直観や本能を人間が取り戻すべき重要なも

のと唱えたロレンスには、「運」を頭で「知る」ことができると思い違いしたポールを死に追いやった母親ヘスターの愛のない生活を批判していると思われる。彼女は愛のない生活の代償として金で買える物質的なものへと走っている。この場合の愛とは夫との関係で言われるべきものであり、W. D. スノッドグラース（Snodgrass）が指摘しているように、ヘスターと夫の間には、ロレンスが説く夫婦の理想的な性愛が欠如していると思われる[35]。彼女は夫との間の愛が欠如しているために、いわば買い物依存症に罹っているのである。そして金によって幸せを買えると勘違いをしている。彼女は夫や子供と真剣に向き合って努力しようとしていないのである。現代人は、愛とはなにか、についてもう一度考え直す必要があるだろう。愛とは温かな人間の関係である、とロレンスも説いているのであり、このことからディケンズとロレンスが求めているものは究極的に同じだということが言えると思われる。

注

（1）三ツ星堅三『チャールズ・ディケンズ―生涯と作品』（創元社、1995年）111 － 12頁。

（2） Dickens, Charles. *A Christmas Carol* (London: Penguin Books, 1843, 2007), p. 2.

（3）*Ibid.*, p. 3.

（4）山田晶子『D.H. ロレンスの長編小説研究―黒い神を主題として―』（近代文芸社、2009年）241頁を参照のこと。

（5）*A Christmas Carol*, p. 6.

（6）*Ibid.*, p.10.

（7）ケロウ・チェズニー著 / 植松靖夫・中坪千夏子訳『ヴィクトリア朝の下層社会』（高科書店、1911年）22頁

（8）*A Christmas Carol*, p. 11.

(9) *Ibid.*, p. 8.
(10) Prickett, Stephen. 'Christmas at Scrooge's in *Charles Dickens: Critical Assesments* ed., by Hollington, Machael, Volume I (England: Helm Information, 1995), p. 559.
(11) *A Christmas Carol*, p. 14.
(12) *Ibid.*, p.16.
(13) *Ibid.*, p.26.
(14) *Ibid.*, p.34.
(15) *Ibid.*, p.46.
(16) *Ibid.*, p. 62
(17) *Ibid.*, p.69.
(18) *Ibid.*, p. 75.
(19) *Ibid.*, p. 79.
(20) *Ibid.*, p. 84.
(21) *Ibid.*, p. 84.
(22) *Ibid.*, p. 91.
(23) *Ibid.*, p.109.
(24) *Ibid.*, pp. 111-12.
(25) Lawrence, D.H. The Rocking-Horse Winner in *The Great Short Novels and Stories of D.H. Lawrence* (Robinson Publishing: London, 1989), p. 967.
(26) *Ibid.*, p.967.
(27) *Ibid.*, p.967.
(28) *Ibid.*, p.967.
(29) *Ibid.*, p. 968.
(30) *Ibid.*, p. 968.
(31) *Ibid.*, p. 968.
(32) *Ibid.*, p. 976.
(33) *The Oxford English Dictionary*, Second Edition, Volume IX (Clarendon Press: Oxford, 1998), p.82.
(34) *The Rocking-Horse Winner*, p. 968.
(35) Snodgrass, W.D. 'A Rocking-horse: The Symbol, The Pattern, The Way to Live' in *D.H. Lawrence: Critical Assessments* ed., by Ellis, David & Ornella De Zordo Volume III (Helm Information: England, 1992), p.425.